「今昔物語集」に於ける「天竺付仏前」に関する幾つかの考察

Anita KHANNA

はじめに

平安時代の多くの文学が、徹底して貴族社会を描いているのに対して、「今昔物語集」は庶民の生活の様子を描く最大の説話集として、大変重要である。「今昔物語集」では、三国つまりインド、中国と日本の視点から、各国における仏教の展開を背景にそれぞれの国で普及した仏教説話、伝説、神話、歴史物語などが整理された形で記述されている。「天竺編」の釈迦八祖、仏後、仏陀の前世の物語り、「震胆編」の親孝行談、王朝史、そして「本朝編」の天狗の話、霊奇談、滑稽な話、恋愛話はその典型例といえる。つまり「今昔」は庶民の習慣、生活様式、信仰、文化などを記した代表的な文献と言えよう。日本でインド哲学の権威といわれた岩本裕氏によると、その規模と内容の多様性においては、同時代の世界文学に他にあまり例がなく、印度のカタサリト・サガル（説話の大海）がその唯一の例であるという。カタサリト・サガルは規模的にも時代的にもそして内容の多様性から見ても「今昔」に似ている面が多いが、仏教の観点から書かれた説話集とは言えない。但し、この中にも、インドの仏教説話におけるものと同類の話があり、両者共にインドの伝説や民話に遡る。

「今昔物語集」の著者や編集の時代や目的については不明確な点が多い。これについてはいろいろな説があるが、一人の僧、或いは僧侶のグループが編纂したと考えられ、このいずれの場合も仏教、特に印度、中国における仏教の展開によく精通した人物が編纂したという事実が明らかだ。

三十一巻からなる膨大な説話集にはエピローグもプロローグもなく原作者の問題は未解決のままで著者による日付け、注釈、署名もないのでこの謎を解くすべもないようだ。

ただし、この膨大な説話集の冒頭の話、つまり第一巻の第一話は「仏陀は人間界に生まれることを決心する」といった点から始まり第三巻まで仏伝を中心に八祖の誕生から涅槃までの各段階、それから仏後つまり仏陀の涅槃のあとのエピソードと仏前つまり仏陀が生れる以前の話が並べてある順序からみると、編集者がインド仏教に精通していたと推察できる。

日本に仏教の伝来とそれに貢献した人物のエピソード、仏教の儀式の由来、法華経を始め経典をよむことの徳、観音菩薩や地蔵菩薩を始め様々な菩薩の奇跡的功績、因課応報、天狗として生まれ変わること、更に藤原家のエピソード、兵士、幽霊、愉快な話、情熱的恋愛物語などがあげられる。これはおおまかに宗教的な物語と世俗的なテーマに分けられる。前者は仏教の見地、仏教の教えと経典の利徳を実践的な側面から述べるもので、純粋な哲学や宗教説話と違い、仏教用語や仏教のしきたりに富んでいる。後者のほうに歴史的・民俗的な影響があり、カタサリ・サガルと似ている。特に道徳や準宗教的な内容でありながら世俗話として定着した話が多くある。

「仏前」とジャータカ

このタイプのプロットが仏教文学にジャータカのような説経に顕著にみられるが、逆の順で変化してきたケースが多いようである。つまり世俗的な説話が仏教説話に変化したということである。これらの例は特に「今昔」の第四と第五巻に多数見られる。四巻の副題は「仏後」で第五の「仏前」という副題とペアになっている。これに仏が涅槃に入ってからつまり仏滅後のエピソードがあり、阿育王のような仏教との関わりを歴史的にも立証できる重要な人物に関するエピソードが見られる。

これに対して第五巻の話には民話的或は伝説的色彩が濃い。およそ半分の話は動物の寓話で残りの半分は国王とその配偶者、隠者や修業者の話である。

元来、「仏前」というと菩薩の話、つまり仏陀としてこの世に生まれる以前に様々な姿で生まれ変わったことの話が見られる。

元来、「仏前」のエピソードというと、歴史的な仏陀以前の伝説や神話を指す。菩薩は仏陀の全ての前世の総称で、善行を積み重ね仏道を追求し、ついには仏陀として生まれる運命にあるとされている。菩薩は人間として生まれることもあり、ライオン、鹿、猿のように動物として生まれたり鳥、木に宿る霊などとして生まれることもある。そのいずれの場合も善業者である。遂には菩提心を得て仏陀になり、過去のことを悟り未来も予知できる超越した存在になる。このため各々のジャータカに二つのプロットが重なる。つまり現世談と過去談のことだ。そして最後の結末の部分に、現世談と前世談の関連が明確にされている。

パーリ語のジャータカ全集には547のジャータカがあり、他の仏典にもこのような話がばらばらの形式でみられるので、総数は遥かに多いとされている。場面のうち約半分は祇園精舎であり、他は仏陀が仏法を説くために泊まった修道院などである。

ジャータカ物語における菩薩の善業は主に波羅蜜に準じている。ヒンドゥー教のように神様にいけにえをささげるような形式上の善業よりは、布施、忍耐、慈悲、友情、般若などの功徳によるもので、その数は六つ或いは十種類に分けられる。仏前の伝説であるしビ王の話しに由来するシビ・ジャータカは布施の典型例として彫刻や壁画にみられる。

「今昔」の第五巻にある前世譚の話に触れる前に仏陀の本性に触れた。「今昔」のような大規模な説話集の基点となって、言い換えれば、仏教の出発点といえる仏陀の人生は仏典で広くとらえられているが、その一貫した形が見当たらな

い。その一貫した形はニダナ・カッタ（因縁物語）にあるが、その内容は歴史的な仏陀以前の仏陀の時代に遡る。そして、歴史的な仏陀が転法輪に努める姿で終る。

つまり仏陀は法を普及し始める点で結末をつける。そして、実際に法を説いている場面を描くことをテーマにする話、つまりジャータカ集（本生譚）の内容と結びついていく。

この本生譚を通して定着してきた概念は、輪廻転生のことであるといえる。この生まれ変わることの背景には前世の業が肝心であり、それに基づいて現在や来世に報いが貰える。これに依って優れた人間として生まれることもあり、卑俗な人間さらに動物、鳥、昆虫などとして生れることもある。

この因果法の働きを指摘しながら仏法を説く独特な作法といえる。これを可能とする方法としては波羅蜜が取り上げられる。

パーリ語で書かれたジャータカ集の話の並び方には特定な順序は見られないが、同じ場面、例えば祇園精舎を場面にする話や動物の話が固まっている傾向が見られる。

今昔物語集とジャータカ

天竺付仏前

今昔物語集の分類のありかたから見ると、その内容は天竺・震胆・本朝に分けられている。各巻に副題も付けられている。特に天竺編の第四巻と第五巻は「天竺付仏後」と「天竺付仏前」となっている。仏後と一対になって仏前の巻きが並べてあることが十分考えられるが元来「仏前」に独特な意味合いがあること、つまり仏教文献において、「仏前」には仏陀の前生の意味合いもある。ゆえに、編者はここで上記のそれを意味しているのか、或いは仏陀が生まれる前の諸仏のことを記述しようとしているのか。あるいは、文字通り仏陀が生まれる前の社会を描写することを考えているのか？　前者の場合、これは菩薩を主人

公とする「本生譚」に相当することになる。後者の場合、釈迦如来の前の諸仏、つまり燃燈仏を初め諸仏のことを述べる試みである。どちらが編者の意図と言えるのであろうか。

「今昔」の第五巻の編者がどれを優先したのか、同巻の内容を通して探ってみることにした。元来、「仏前」に相当する各話に菩薩が主人公として登場してくることを基に考えると、第五巻の三十二話のうち、菩薩という言葉が第一三話と第二十一話の二つの話にしか登場しない。

菩提

ここでまずその二話を取り上げる。

「今昔」のこの第五巻の13話はジャータカでは兎として生まれた菩薩のまごころを語る一話である。題は「三の獣、菩薩の道を行じ、兎身を焼く語」。

この菩薩道としてどのようなことを行ったかというと、年寄りを親のように敬うこと、自分より年上の人を兄のように扱い、年下の人に弟のように思いやりをかけることをし、自分よりは他人の事を優先するように心がける。つまり慈悲の心を養うことに相当する。インドのジャータカも、多少違っていても徳のある行為を行う精神は同じである。ジャータカの同話の場合、崇高な道を追求する、つまり臆病な行動を見直すことや布施を施すことを心がける。この話では菩薩道として布施の大切さが掲げられている。

次に同巻の二十一話を取り上げる。題は「天竺の狐、虎の威を借りて責められて菩提心を発すこと（21話）」であり、動物の自慢話の一種といえる。ライオンの助けを借りて一緒に暮すうち、自分のアイデンティティーを忘れる狐の話。

これはジャータカ、パンチャタントラ（第四章四話）、カターサリットサーガラにも見られるモチーフである。

同話のあらすじを簡単に述べて見る。

ある狐が、ライオンの威を借りて動物を脅かす。これを知ったライオンは狐

のところに行き、その理由を尋ね狐に襲いかかった。狐は逃げようとした時、思いがけず深い穴に落ちてしまう。死に直面した時、世の無常を感じて「昔の薩埵王子は虎に身を施して菩提心をおこせり」ということを思い出し、自分も悟りを得ようとし、仏道を求め、同じく献身すると心掛ける。暫くすると穴から出ることができ、危機から免れた時、菩提心のことをすっかり忘れる。そのとき文殊・帝釈天に脅かされ立ち竦んで、以前に決心したことを思い出して述べる。そこで神は狐のことを気の毒に思い「汝、一念の菩提心をおこせるに依て、命終して後釈迦佛の御世に菩薩と成りて二の名を得可し。一は大弁才天といい、二は堅牢地神という可し。」

このように「狐は虎の威を借りる」という諺の由来を語るテーマを利用して、瞬間の後悔により改心して生れた信仰心が、奇跡的な応報をもたらすことを説いた説話に変化したと言える。同話には因縁談もあるので、ジャータカの形式となっている。

更に同話に引用されている「虎に身を施した菩薩」のモチーフは、「今昔物語集」同様法隆寺の玉虫厨子にも「捨身飼虎」の図として描かれていることで日本で広く知られている。『ジャータカ・マーラー（ジャータカの花輪）』（2世紀頃）というジャータカ集にも、作家のアールヤ・シューラが、実際に菩薩のように自分の体を飢えた虎に捧げたという伝説がある。

天竺編にある説話は、宗教的な教えとしては、念仏の功徳を語る。とくに平安後期には、仏教の儀式的な側面よりは深い信心を重視する傾向が強まったので、仏法に救済を求める簡単な方法として「念仏」の功徳を語るのである。

因縁譚

「今昔物語集」には鳥獣が登場する物語があるが、すべてが動物寓話というわけではない。動物寓話の良い例は巻五に限られており、その形式は本生譚に近い話が多い。殆どの場合、本生譚の特徴である冒頭の説明が省略され、結末の部分に因縁譚が加えられているので、ジャータカと思われていないこともある。更に話の因縁譚に釈迦仏が必ずあるが、第五巻の説話では結末に因縁譚が

あってもパターンは様々である。(例21話、22話)。

特に因縁譚がある説話群は第七話から十二話まで続いているが、十話までは釈迦仏と提婆達多の対立の話しであり、次の二話が釈迦仏と弟子・羅漢のことを扱う。

更にまた、十四、十八、二十二、二十六、二十九もそうなっている。

特に因縁譚がある有名なジャータカも三、四話ある。特に「獅子、猿の子を哀れび肉を裂きて鷲に与ふること(第十四話)」は、結末に「その獅子といふは今の釈迦仏此也。其の雄猿といふは今の迦葉尊者也、雌猿といふのは善護比丘尼也。二の猿の子といふは今の阿難・羅睺羅也、鷲といふは今の提婆達多此也(後略)」。

因縁譚がある動物の話には、「身の色九色の鹿の語(18話)」の場合、「九色鹿は今の釈迦仏にまします…(中略)…鳥は阿難也、后というは今の孫陀利なり、水に溺れたりし男は今の提婆達多也」となって約束を破った恩知らず人間のモチーフになっている。更に、「天竺に林中の盲象、母の為に孝をいたす語(26話)」は親孝行の功徳を取り上げる説話で、子象は釈迦佛の前世となっている。同巻の「五人、大魚の肉を切りて食する語(29話)」のモチーフは上記の説話のように自分の肉を捧げる菩薩の説話と同様で、大魚は釈迦仏の前世であり、その肉を食った五人は仏陀が最初に教化した五人の比丘のことである。

以上は、本生譚形式の説話で結末に因縁譚の記述がある第五巻の説話である。

本生譚

しかし、これに対して元来釈迦物の本生譚としてよく知られている説話はこの「仏前」の巻きに収められているが、因縁譚もなく菩薩のことも一切も触れていない。例えば、五巻の冒頭にある説話「僧カ羅・五百商人、共に羅刹国に至る語(1話)は有名なジャータカであるが、第二話の「国王、鹿を狩りて山に入り娘を獅子に取られること」とともに、羅刹国と獅子国の名前で知られたセイロンの島の建国伝説を語る。この仏教建国伝説は大唐西域にもある。「今昔」では両者のうち仏教伝説が先にあり世俗的なポピューラな話(2話)が後

にある。ジャータカ自体では雲馬として生まれたときの仏陀の前世の説話となっているが、「今昔」では観音信仰のほうに近い説話になっている。

これと同じように一角仙人のテーマも、ジャータカでは「アランブサ・ジャータカ」、「ナリニカ・ジャータカ」として二つの説話として見られるが、「今昔」の第五巻に「一角仙人、女人を山より王城に来たること（4話）」となっている。有名なジャータカであるにもかかわらず因縁譚が省略され、色欲のために神通力が失われた、高僧の仙人の墜落の話である。日本ではこのテーマは大変人気を呼んだらしく、単に文学だけでなく、能や歌舞伎のような古典芝居にも広く取り入れられてきた。

終わりに

経典と共に、インドの古典に由来するテーマが漢訳仏典を通して日本に伝来した。更に『パンチャ・タントラ』の寓話は別のルーツで普及し、世界中知られている。この寓話集を論拠にヨーロッパの学者セオドラ・ベネフイ氏（ドイツ人）は、世界の寓話の大半はインドから来ていると述べる。旅行者や商人や僧や侵略者の移動が、物語の普及に貢献したことは既に知られている。

受け入れる側の立場から見ると、自国の文化が外国から導入されるテーマをどれほど受容しえるかを計る基準として、そのテーマの普遍性が挙げられている。インドの叙事詩を初め、ウェーダやプラーナのテーマにこの要素が富んでいたために多くの国に普及してきたとも言える。同時にこのように定着してきたテーマにおいて起源の国の文化の影響がいかに薄まったか、という事も一つの基準とされる。この点から見ると「一角仙人」のテーマも動物寓話もその最も優れた例であるといえる。インド叙事詩の「ラマーヤナ」から出発して歌舞伎十八番に採用されたこのテーマは、いかなる柔軟性を孕んでいたのだろうか。

「今昔」の作者もその普遍性、或いは柔軟性を良く利用し、それに日本文化の要素を加えることができたといえる。この「仏前」の巻の場合も、説話の焦点を仏陀の前世の名称である菩薩に限らず、より広い意味で、観音様（1話）、

ビャクシ仏（5話）の功徳を語る説話や「善悪一つ也」（4話）のような理屈を説く話に変えて、当時日本で広まっていた信仰に合うよう調整しながら、想像してインドで仏教の展開を述べようと試みたようである。

五巻の説話の並び方からも明らかであるように、仏教が栄えたセイロン島の建国伝説を述べて、央掘魔羅、阿邪世王のような仏典に登場する歴史人物（3話）や仙人の墜落（4話）のテーマやビャクシ仏のことを取り上げてから、釈迦物の前生に触れている。この場合も、インドにおける仏教の展開の観点から説話を導入したと思われる。つまり第七話からは仏教と外道の対立が象徴しているように、提婆達多の因縁を通してインド既存の信仰と対立が記述されている。次に仏陀の弟子や羅漢のことに触れ、菩薩と関連ある六波羅蜜の概念を利用して菩薩の善行を述べようとしている。そして五巻の終わりに「七十に余る人を他の国に流し遣る国のこと」のテーマを通して、親孝行を果たすこともなく年寄りを敬うことも無い、道徳が衰えている社会の実態を描いている。作者は仏の前の社会を仏後と同等に描写しようと志したといえるが、菩薩の概念を利用して本生譚を使うことによって、観音様や比丘、文殊菩薩など仏教と関連がある名称を、自然に「仏前」の巻に記述することに成功している。

＊討議要旨

相田満氏は、インドでは仏に対する文殊・観音・地蔵などの区別があまりないとされるが、「今昔物語」に見られるように日本では個別性に対するこだわりがある。こうした状況をどのように思うか、と訊ね、発表者は、インドにおいて知名度の低い文殊などが日本で諺などにも用いられているのは、漢訳仏典の影響であろうか。「今昔物語」からは、多様な仏教知識を収集しようという編集方針が見受けられる、と答えた。